

新米クリニック経営者のドバイ診療記
- “ハラハラ・ドキドキ” から “ワクワク・ドキドキ” への転換点-

医療法人こころ満足会 形成外科KC
新城 憲

20年の勤務医生活に終止符を打ち、2007年6月にクリニックをオープンしました。当初は、閑古鳥の日々と、経営者として10余名の職員を一つの方向に導くことの難しさに、経験したことのない落胆とストレスを感じていました。

その最中、開業準備を一手にこなしてきた妻は、当時も、飛ぶ鳥を落とす勢いの中東、アラブ首長国連邦（以下UAE）のドバイに足を運んでいました。毎日、寂しげに机の番をする私の姿を見て、医療に関して素人の妻は、「どこかで形成外科医としての経験と技術を活かす場はないか」と考えていたようです。経営コンサルタントA氏に現地で会談、私がドバイで診療するための情報収集を行っていたのです。経営的にも厳しい中、新米経営者が“ハラハラ・ドキドキ”の日々を憂いているのに、なぜ『ドバイ』なの？、と不思議でした。

ただ、妻の先見の明に一目も二目も置く私は、その話に乗ってみようと思意、準備行動に着手。膨大で煩雑な申請手続きを経て、2009年7月に初めて同地を訪れ、面接試験に臨み、UAE全域の公立病院とドバイ首長国のクリニックでの診療が可能となる医師免許を取得しました。運良く後見人となる雇用主の証明を経て、就労ビザを取得し、2011年9月から、晴れてドバイで診療、手術ができました。

この計画には、3ヶ月毎に診療して、オイルマネーで潤う中東のドバイで手術することで、クリニックの経営に貢献することが織り込まれていました。しかし、現実はそれほど甘くありません。沖縄のクリニックを休診にしたうえで、移動・滞在費をカバーできるほどの収益を上げ続けるのは、難しいことが、程なくわかりました。挫折しかけた気持ちを支えたのは、ドバイで苦勞して今の地位を築いたA氏がつぶやいた「継続してやってみないとわからない」の一言であり、夢を追いかける人々を引きつけるドバイという土地に立ったときの“ワクワク・ドキドキ”感でした。

この砂漠の地に、いずれも世界一の高層ビル、ショッピングモール、港湾、人工島、噴水、屋内スキー場などを造り、さらに金融・流通・交通・観光・医療の拠点となって安定的に成長する国を創ろうとする人間の叡智と努力に、訪問するたび感動し、生きる力をもらいました。“ハラハラ・ドキドキ”の新米経営者だった私が、“ワクワク・ドキドキ”の形成・美容外科医へと変わり、いつしかクリニックの経営もスタッフとの関係も良好な状態に向っていきまし

た。その転換点が、ドバイの地に降り立ったことであったのは間違いありません。2021年11月、コロナ禍の中、診療としては37回目、通算43回目のドバイ滞在中に、この文章を書いています。「クリニック経営の“肝”は、こころの内側にあること」に開業4年目に気づいたのは、『ゼロより1で、やってみた』から。ドバイは2021年EXPOでさらに成長し続けています。（なお、詳細については私のブログ、[「http://kcblog.ti-da.net/」](http://kcblog.ti-da.net/)をご笑覧ください。）

写真はドバイクリークの夕陽

